インクルーシブな保育の実現
- 保育者がサポーターとして機能するために -

企画者　守　巧（東京家政大学）
司会者　守　巧（東京家政大学）
話題提供者　広瀬由紀（植草学園大学）
守　巧（東京家政大学）
若月芳浩（玉川大学）
指定討論者　太田俊己（関東学院大学）

KEY WORDS: インクルーシブ　保育　保育者

【企画趣旨】

近年、保育現場では、特別な配慮を必要とする子どもが増えてきている。このような子どもは、多様な要因が背景にあるため、個別性が高い。そのため保育者は、子どもが示す行動の問題の所在が分かりづらい。くわえて、配慮を必要とする子どもの特性として、社会性の欠如が挙げられるが、年々当該児以外の子どもたちも社会性が乏しくなってきている。したがって、保育者は、当該児への支援や工夫の他、他児に対する保育技術や保育展開の工夫が求められる。そして何より、クラス全員の生活を支える保育者の保育実践や子どもに対する姿勢や気構え等が必要となる。

そこで、本シンポジウムでは、充実したインクルーシブな保育を目指すために、具体的な事例や提案をもとに保育者が子どものサポーターとして機能するための討論をしていきたい。

【話題提供者の趣旨】

話題提供：保育における子どもへのまなざし

とある公立保育所での話。加配のA先生は、担任との連携を密にとりながら、場や方法を工夫して日々の保育を展開していた。特に印象深いのが、運動会に向けた活動展開である。クラスに視覚的な働きかけのほうが優位と感じる子がいた。ダンスに向けた活動の際、A先生は最初にあえてその子を参加させなかった。それは、混乱に満ちている初期から参加するのは、その子にとって最もよい方法だろうかと考えたからだった。その後、全体の動きが整ってきたところで、まずは活動風景を一緒に見ることから始め、ダンスへの意欲を高めてから実際に活動に参加した。A先生は、「今はこうしなければならない」というより「今子どもがどうしたいのか」というまなざしを強く持っていた。そして、そのまなざしを具体化するために、場を豊かに活用し、周囲を大いに巻き込みつつ、保育方法の選択肢を増やしていたように感じる。当日は、他の保育者の例も含め話題提案したいと考える。（広瀬由紀）

話題提供：保育者の特性をつかむ

保育者は、何らかの保育者観や子ども観等が土台となって、日々の保育を実践している。これは、意識しているか否かに関わらず、どの保育者でも持っているものである。筆者は、幸運にも様々な保育者と接する機会があり、障害がある子や気になる子を中心にコミュニケーションをすることがあるが、そこには「保育者の特性」があるように思える。まず、保育者を支える立場にある者は、この特性をつかむ必要があるのではないだろうか。つまり、保育者をサポートする立場にある者は、保育者の考え方や特徴をつかむことによって、保育者のポジティブな側面を引き出せ、支援の手がかりにできると考える。

しかし、先行研究では保育者よりも障害がある子や気になる子への行動変容を促す研究や保育実践に焦点化した研究が主であり、保育経験年数などを含めた保育者側の研究が皆無に等しい。そこで、障害がある子や気になる子を核とした保育者の特性等を話題として提供したい。（守　巧）

話題提供：保育者を支えるために必要な園内連携

インクルーシブな保育を実現することは容易ではない。それは保育者の日々の保育に難しさが生まれる可能性が高いためである。難しさが生まれた時がとても重要な保育の転換の時であることを園の運営の中心になる保育者が強く意識しなければならない。入園前の情報収集から始まり、当事者の保護者との対話、周囲の保護者との関係と理解、入園後のアセスメントと記録、担任保育者の後方支援と加配保育者との関係性、情報共有など多義に渡る。若い保育者が日々自信を持って保育に取り組むためには、園内の関係性の構築と働きやすい環境が大切なだけでなく、悩みや問題を共有し、対話と笑いが活発になるために、園長や副園長、主任などのファシリテーションが重要である。どのような子どもや保護者に対しても丁寧に対応することが可能となる強い組織を形成することが、インクルーイブな保育を実現するために最も重要であると考える。当日は具体的な事例などを含めて提案したい。（若月芳浩）

指定討論：インクルーシブな保育の中の保育者とは？

インクルーシブ保育の実現には、その子たちを受け入れた園としての体制整備が第一に求められる。乳幼児期の保育では、子ども主体に、個々の個性を大事にする理念が認められやすく、個人差に応じた保育も基本であるので、インクルーシブに保育が展開されやすい素地がある。しかし、そこで質高い保育を進めるのは保育で協働する保育実践者たちである。園がインクルーシブな体制にはない場合にも、保育者が公平な子ども観を深め、障がい等のある子も含め、どの子も主体的にとり組みやすい実践への工夫に努力すれば、インクルーシブな保育の質は担保されるに違いない。園がインクルーシブにありたいと志向しても、公平さに立たない保育者の子ども観・障がい観と、それにより一部でも主体的には取り組めない子たちを排除する保育を行って問題としない保育者がいれば、真にインクルーシブな保育は成立も進展もしない。鍵となる保育者のあり方について討論したい。（太田俊己）

（HIROSE Yuki, WAKATSUKI Yoshihiro,　OTA Toshiki,, MORI Takumi,）